

長門市棚田ブランディングと地域資源を活かすファッションの共創 － アグリアート・フェスティバル2017とSGFWS2017を事例として －

Co-creation between the Branding of the Rice Terraces of Nagato City and Fashion -
activated Regional Resources - a case study of Agri-Arts Festival 2017 and SGFWS2017

水谷由美子*

甲斐少夜子・原田章子・荒木麻耶**

高橋潤一郎・松浦奈津子***

DOZAN 11****・三木学*****

Yumiko MIZUTANI

Sayoko KAI / Akiko HARADA / Maya ARAKI

Junichiro TAKAHASHI / Natsuko MATSUURA

Dozan11 / Manabu MIKI

キーワード：服飾デザイン 農業 サービスデザイン 地域資源 ブランディング フォトミュージック

Key words : Clothing Design Agriculture Service design Regional resources Branding Photo Music

Abstract

This paper, uses the Agri-Art Festival 2017 and SGFWS2017 as a concrete case to show the effects of the “co-creation of branding of the rice terraces of Nagato City and the fashion-activated regional resources”

Yuya, Nagato City is famous for its rice terraces in Higasi-Ushirobata. There are used to be rice terraces all over the hills, but today the rice terraces are cultivated in an extremely limited area because of the declining birthrate and increase in elderly people, and the progress of depopulation in the area.

In order to revitalize the local community, we have held a fashion show every year in Yuya, Nagato City since 2013 to aim for the promotion of agriculture.

In this paper, we verify the concepts and the contents created by the practitioner regarding Agri Art Festival 2017 ～ The Force of Water ～ and Super Global Fashion Workshop (SGFWS2017).

In particular, we have been developing products of the label “mompecco” as workwear that can be worn everyday since 2014 based on *mompe*, which are pants for farming.

We emphasis mompecco development again to verify the significance concretely by mentioning the viewpoints and contents of the development which included the rural fashion shows through to the present project, in order to confirm the total process. In addition, we aim to extract issues for the future comparison of mompecco products which have been developed every year since 2014.

*山口県立大学大学院国際文化学研究所教授

**山口県立大学大学院国際文化学研究所2年

***山口県立大学大学院国際文化学研究所1年

****歌手/音楽家

*****株式会社ビジョナリスト

はじめに

本論では、「長門市棚田ブランディングと地域資源を活かすファッションの共創」を主題とし、具体的事例として、アグリアート・フェスティバル2017とスーパーグローバル・ファッションワークショップ（以下ではSGFWSと記す）2017を扱う。

長門市油谷における特徴は、東後畑の棚田である。かつては丘全体が棚田で埋め尽くされていたが、現在では少子高齢や過疎化が進行し、限られた空間へと狭められている。

そこで2013年から長門市油谷でファッションショーを開始し、農業振興を目指して今年まで5回続けてきた。

特に、農作業用のズボンであるもんぺを日常着としても着られる仕事着として展開させ、mompekkolabelの開発を行ってきた。今回は改めて、このmompekkolabelの開発に重点をおき、ルーラル・ファッションショーから現代までの開発の視点や内容などを記述するなど、一連の経緯を確認することで、開発の意義や内容を具体的に検証したい。

また、2014年より毎年開発してきたmompekkolabelを比較することで、次の開発に向けて課題を抽出することが目的である。

1 mompekkolabel開発の概要

(1) mompekkolabel開発の背景

mompekkolabelは、企画デザイン研究室が企画及びデザインし、「有限会社ナルナセバ」とプロダクトブランド「匠山泊」との共同プロデュースによって開発してきたものである。このプロジェクトは安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人との共同研究であり、長門市の受託研究としても実施しているものである。

具体的には2013年から産学公連携により、長門市油谷の日本海に臨む東後畑の棚田のブランディングと農ガールコレクションを通じて地域の若者に農業に興味を持つ動機付けをするための活動として始めたものである。

もんぺに着目したのは、2005年に実施した「ルーラル・ファッションショー」で開発した「モンペ・ヌーヴォー」が最初である。この時は、自然と非常に近い関係にある山口市の生活環境を背景として、農作業着に着想を得た日常着を提案し、生活スタイルを提案した。

(2) 農ガールコレクションとmompekkolabel開発:伝統的縞柄からの発想

まず、農作業をするための仕事着として、日本で伝

統的に使用されてきたもんぺを原型とし、オリジナルに染織した布を用いたmompekkolabelを開発した。農ガールコレクション第1回目の2013年は山口県に縁のある世界の国に固有の生地を用いた mompekkolabel global、および東日本大震災の後の交流によって知った会津若松市の会津木綿と山口県で復興された柳井縞などの縞柄木綿生地に着目した。

縞柄は極めて基本的な織り手法で、世界に偏在している。安倍昭恵氏の「伝統的な縞柄を継承していくことは重要だ」という発言に勇気付けられ、この5年間で、縞柄のデザインを研究してきた。

2014年から2016年にはオリジナルの縞織りを柳井縞の会に依頼している。それに加え、mompekkolabelの商品化に向けて、コスト面での妥当性を与えるために、オリジナルの縞柄の布の製作を、伝統工芸品の久留米紬と久留米織りの技術を融合させて独自の生地やオリジナル商品を開発している合資会社ロオーリングへ依頼してきた。ここで開発したオリジナルの広幅生地の縞模様は、新しい山口の伝統縞になることを願って、「やまぐち縞」と名付けた。

2014年はラップランド大学とのワークショップを行ってきた中で、フィンランドの主に女性の民族衣装の特徴は縞柄（地域により経縞や緯縞がある）であることに会った。そこで、フィンランド語の縞を意味する言葉raitaを起用して「やまぐち縞raita2014（以下、やまぐち縞raita）」の名称にて縞を考案し、緯糸を変えることで5種類のmompekkolabelを開発した。

2015年は7月にショーを実施することから、「和敬清寂～夏は涼しく～」というタイトルの元で、日本の伝統的な縞柄である「滝縞」とフィボナッチ数列を掛け合わせた柄「やまぐち縞takijima2015（以下、やまぐち縞takijima）」を考案し、緯糸を5色にして5種類の縞のmompekkolabelを開発した。

続いて2016年は「自然との対話」をテーマとして、陰陽五行思想を色で展開させ、青を現代の意味において青と緑は、かつて「あを」と共通表現していたことから、青と緑を採用し、さらに一着に5色の縞が表現できるようなものなど7色の「やまぐち縞cosmo2016（以下、やまぐち縞cosmo）」のmompekkolabelを開発した。

(3) mompekkolabel×PhotoMusic

以上のような経緯にて、2017年度の開発は「水の力 The Force of Water」を下に、PhotoMusicという新しい視点を導入することにした。

そこで今年の縞のアイデアは、DOZAN11や三木学

たちが開発したPhotoMusicのversion2に触発されて、共同研究を行うことになった。PhotoMusicのソフトについては本論で詳細を述べるが、写真を変換して音楽を生成することができるスライドショーソフトである。特に、写真をスキヤニングするように、画面左から色分解する映像エフェクトがあり、音楽生成と連動して、風景写真などからも多様な色彩のストライプが現れる。そこで「風景を着る」をテーマに、この技術を用いてmompekkkoの新しい縞柄デザインを行うことにした。

農ガールコレクションの重要な目的の1つは、日本の棚田百選に選ばれた東後畑の棚田のブランディングであり、他方では近年急速に国内外の人々に人気のデスティネーションになっている元乃隅稲成神社の話題性と呼应しようとするものである。

それ故に、美しい風景の写真から縞を抽出すること、さらにそこから音楽が奏でられるというアイデアが今回の重要な表現要素となる。

(4)やまぐち縞の応用

2014年から開発してきたやまぐち縞を用いたモンペッコは、少量生産され商品化が実現され県内各地やインターネットを通じて全国で販売されるに至っている。ここでの課題は、少量ゆえに高額となることである。また、消費者に認知してもらい、絶えず訴求性を高めるための宣伝戦略を継続することも課題である。そこで、やまぐち縞をモンペッコ以外の衣服やアイテムにも活用し、認知度を高める活動を行った。

アグリアート・フェスティバル2017においてアンケートを行なったが、モンペッコの所有者であっても、やまぐち縞の正式な名称を知らないという結果を得た。

そこで、まだやまぐち縞の認知度が低いということから従来のmompekkkoについて、改めてコンセプトや縞の特徴およびパンツそのもののパターンについての変化やそうした理由などについて以下で検証することにした。また、やまぐち縞を地域固有の伝統の縞へと成長させるためにも、山口県プロサッカーチームの公式キャラクターの衣装にも活用した例を挙げる。

また、棚田のブランディングのための取り組みとして、日本海を借景とした稲穂に満ちた棚田の空間を野点の空間に見立てて、茶会を実施した。棚田は、米の生産の場であるが、美しく愛でられる空間でもある。そうした視点の転換として田に2畳の空間を刈り取り、その中でゆっくりと秋晴れの空の下でお茶会を実施する試みについても検証する。ここでは、茶会の亭主と客がともにモンペッコを着用しており、作業着という

意味ではなく、水田内での野点の象徴的な装いの意味を持たせている。

(5)農作業と農作業着そして6次産業への発展

はじめて発表した農ガールコレクション（当初は農業スタイルコレクションと呼ぶ）がニュースに取り上げられ、2014年の春に一般社団法人おんなたちの古民家から田植えフェスティバルへの参加要請と一般参加者へのモンペッコのレンタル依頼があった。

これをきっかけに、実際の農作業着としてmompekkko globalは農作業着としてのデビューを果たした。実際の農作業着のパンツとしてパターンについてチェックをしたり、借景としての山そして水を張った田園に対して調和するかなどの確認を行ったり、デザインする上でリアルな検証をする機会となった。

当時、各県の活動と同様に山口県でも6次産業への活動が農家で活発に行われていた。その中で、モンペッコを着用して作ったお米でできたお菓子として「モチベッコ」が誕生した。このお菓子は現在各地で販売されており、知名度を高めている。

2 工業製品として開発されたmompekkko

mompekkko global

1) テキスタイル

地域資源を活かすことやオリジナルであることを考慮して開発することにした。現代の日本のファッションブランドのオリジナリティは、生地から開発することから生まれていることが多い。日本には着物の素材作りとしての伝統はあるが、洋服用の生地作りの歴史は浅い。

それが功を奏して、産地とデザイナーは親しく繋がり、共同でオリジナルの生地を作ることから始められるのである。1970年度の後半から日本でもすぐれた繊維が製造されるようになり、イッセイミヤケなどは地域の伝統染織文化をパリのプレタポルテ用の素材へと変換して新しい布に変容させている。

1980年代にパリに進出したYoji YamamotoやCOMME des GARÇONSは共に岐阜の工場とのコラボレーションを行っていることで有名である。

最近のデザイナーでは、minä perhonenやmatohuなどが伝統染織技術や工場を振興するような活動を行っている。

ここでは容易に繊維からデザインすることがむづかしいので、山口県縁の生地を選び使う方法をとった。

そこで、ハワイ移民の関係でカウアイ島との姉妹交流がある周防大島の道の駅には、アロハシャツやアロ

ハ布が販売されている。そのことから、アロハ布を選んだ(図1)。

萩出身の地質学者にして日本画家になった高嶋北海は、フランスのール・ヌーヴォーへ深く影響を与えたことから、フランスの小花柄の生地をパリのモンマルトルの布地屋で見つけ採用した(図2)。

さらに東日本大震災後、東京から山口市へ移住してきたガーナ人に因み、世界で注目されて来ているアフリカのワックス染織の生地を活用した(図3)。

本大学と学术交流協定を結んでいるフィンランドのラップランド大学との関わりや、当研究室の卒業生がファッションデザイナーとして活躍しているマリメッコから2002年のクリスマスファッションショーのために

提供された、ユニッコのテキスタイルを使ったモンペッコを製作した。(図4)。

加えて、2013年当時、モードを象徴するテキスタイルとして、匠山泊から提供されたカモフラージュの柄を使用した(図5)。

以上のように山口緑の国の生地を選んで、mompekkoglobalと命名をした。

また、長州と会津の交流も目的にしたショーであったため、会津若松市で継承されている会津木綿を現地の製造元である「会津木綿 山田織元」で分けてもらい使用した(図6)。会津木綿は、機械織りのため、手織り手染めの柳井縞に比べると商品化した場合にコストは抑えられる。実験的に前面に会津木綿を使用す



図1.mompekkoglobal ハワイ



図2.mompekkoglobal フランス

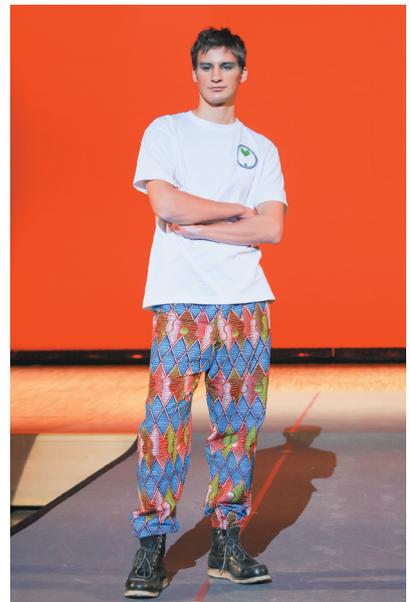


図3.mompekkoglobal アフリカ



図4.mompekkoglobal フィンランド



図5.mompekkoglobal モード



図6.mompekkoglobal 会津木綿

るモンペッコを制作した。結論としては、部分づかいでなければ、採算のとれないものになった。

2) パターンについて

2013年5月20日、安倍昭恵氏を交えての農ガールコレクション実施のキックオフミーティングが開催された。このことは広域に報道され、その結果、日本農業新聞から「誰もががつくれるもんぺ」を考案してほしいという要望があった。

この要望と目的は開発準備のために、もんぺの過去から現代までの歴史を検証した。そして、形態と素材の観点及び、使用用途からもんぺを定義した。しかし、それだけではもんぺを定義することは不可能なため、名称において独自の名前を付けた。

新聞紙上用の開発では股上が直線であることは第一の特徴である。誰にでも作れるという発想からの出発から生まれたパターンである。また、前後のわずかなだぶつきが個性になっている。その他全ては直線で成り立つパターンである。ポケットは右後ろにジッパー付きのもの一つである。脇の直線はステッチを入れることでパンツとしての存在感を際立たせる効果をもたせた。さらに、若者にも好まれるようなシルエットにするため、腰部はゆったりとしながらも、膝から足にかけては比較的ほっそりとしたパターンを考えた。様々な体型の人による試着を経て、制作を行った。

2.1 mompekkoglobal

1) やまぐち縞raita2014

山口県の縞と言えば、柳井縞であるが、世界に目を

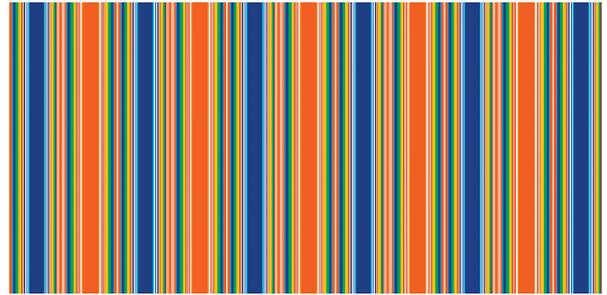


図7.やまぐち縞raita2014



図8.モンペッコやまぐち縞raita

向けると多くの縞が民族衣装に登場する。当研究室が長年交流してきたラップランド大学で実施したワークショップにおいて、フィンランドの国民服の特徴は縞柄であり、縞のことをフィンランド語で「raita」ということを学んだ。やまぐち縞raitaでは、フィンランドの伝統柄から山口でも受け入れられるような美しい縞柄を選び、それを基にグラフィック処理をしてデザインした。柳井縞は手染め手織りのため高価になりすぎるので、生地からオリジナル製産することで商品化を目指した。

柳井縞を参照しながらもフィンランドの民族衣装に見られる縞幅のバランスや色調、モチーフを農作業着に合うようなものを取り込んでいる。緯糸は2種類の黒糸（スラブとネップ）、紺系、青系、そして山口の象徴として夏みかんの色の5色を選んだ。限られた生産量の中で同一の経糸を用いたが、上記のように緯糸によって、印象の異なる生地の製産を可能にした。

2) モンペッコやまぐち縞raita

2013年モンペッコグローバルのパターンを基に、改善のために2つの方法での調査・研究を行った。1つは、

農林水産省経営局就農・女性課の「農業女子プロジェクト」のメンバーへのモニタリング、他方は、サービスデザインの手法を用いたペルソナを「山口で農業高校を卒業し東京の大学に進学して卒業後、そのまま東京でOLをしていたが、仕事を辞め、ちょうど実家に帰ってきて農業をしている26歳の女性。遠距離恋愛をしており、たえず電話でのやりとりが気になっている」と設定して、サービスプロトタイプングシステムSPSを用いてロールプレイングを実施した。具体的にはポケットの位置などを検証した。さらに、当研究室メンバーで田植えを実際に行い、機能性などの観点を考慮しつつ商品化を目指してデザイン提案を行った(図8)。

その結果ポケットは、前側の方が便利で、ポケットの数は多い方が良いという意見が多かった。このことを考慮し、製産コストとの兼ね合いにより、基本はパッチポケットの形成だが、上布を二重にして、ファスナー付きでもものが容易に落ちないように工夫した。これはモンペッコやまぐち縞Nagato(以下、モンペッコNagato)までのポケットデザインの共通点となっている。

また、残った生地を有効利用し膝と股の当て布にしている。これはモンペッコやまぐち縞raita(以下、モンペッコraita)の大きな特徴である。mompekkoglobalで活用した2013モデルとの大きな変更点は、股上の削りを直線から曲線にして、シルエットに自然の丸みを出した。そして2013年モデルと同様に直線の脇線はステッチで押さえて、従来のもんぺ商品に対してアパレル商品としての差別化を図った。

2.3 mompekkoglobal2015

1) やまぐち縞takijima2015

開発にあたり、共同開発者の安倍昭恵氏より日本の伝統文様を継承することは意義があるとの助言があった。また、アグリアート・フェスティバル2015は7月の開催であったことから、「和敬清寂～夏は涼しく

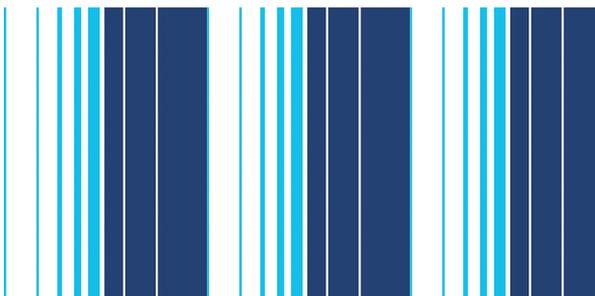


図9.やまぐち縞takijima2015

～」をテーマにした。そのために暑い夏に目で涼をとる日本人の知恵を表現している伝統縞柄の滝縞をベースとした。そして、日本の伝統作業着もんぺを現代風にアレンジしたモンペッコに、農作業の大地と繋がる行為を敬う表現として、自然界の数比列「フィボナッチ数列」を掛け合わせた。「フィボナッチ数列」は花卉の数、松かさの螺旋模様の数、向日葵の花の種の螺旋模様の数、茎の葉の付き方(葉序)などに見られる。葉序については、葉が効率よく光合成をするためには、上下の葉が重ならないようになっている。これは、人を敬い共存していく日本人のコミュニケーションにも通じる数の比喩であると考えられる。そうしてやまぐち縞takijimaは自然界の数美学と日本の伝統縞模様を掛け合わせ、美しさと涼しさを融合した縞としてデザインすることに至った(図9)。

経糸に藍、浅葱、白の3色を使用し、至近距離では細かな縞模様が認識出来、遠目では太い縞模様に見えることが特徴である。緯糸には紺、水色、白、赤、緑の5色を使用し、同一の色組成の経糸から5色の異なる印象のカラーを展開した。これらの色は、長門市油谷東後畑の棚田の地域創生のブランディングを鑑みて、長門の自然の風景や印象から選択し、棚田に沈む夕日の陽(Hi)、山から海へ流れゆき磨かれし神秘玉(Gyoku)、広大な日本海・雲ひとつない空(Sora)、楊貴妃が眠る深き紺碧の海(Umi)、千年先も続いていく母なる故郷の森(Mori)と名付けた。

2) モンペッコやまぐち縞raita

もんぺという農作業着を現代のライフスタイルに受け入れてもらうためにはどうすべきかを考慮した。都



図10.モンペッコやまぐち縞takijima

会では田舎暮らしへの憧れはあるが、実生活に取り込むには厳しい現状がある。そこで、若い世代にもんぺを知ってもらうために、農作業着のみでなく、ヨガなどのスポーツウェア、散歩用の街歩き着、部屋着としてのルームウェアなど、着用例を増やすことを目指した(図10)。

もんぺに関する快適性はゆとりであり、この機能性は残しつつ、シルエットは限りなく細身のデザインにした。また、裾ゴムがすぐに取り出せるように約1cmの空きを作っている。それゆえ、ストレートのパンツとしても着用できる。モンペッコraitaからの改良点は、股下を長くし、ウエストゴム幅を2cmから2.5cmに広くした上で、ゴムが捻じれないように中心にステッチをかけている。また縫製糸の色と太さにこだわり、ステッチを際立たせ、農作業着ではなくアパレル商品としてのアイデンティティーを持たせている。色は、海(紺)が一番人気で、次に陽(赤)、玉(白)の順である。

2.4 mompecco2016

1) やまぐち縞cosmo2016

古代より自然界や伝統文化を規定してきた「陰陽五行思想」に着想を得て、やまぐち縞cosmoを開発した(図11)。陰陽五行思想は陰陽思想と五行思想が結びつき、成立したとされている。五行思想において、自然界は、木(もく)・火(か)・土(ど)・金(ごん)・水(すい)の5つの要素から成り立っているという考え方があり、これらの五行の5つの要素は、季節や方位、色彩、臓器などそれぞれ配当されている。木は「青」、火は「赤」、土は「黄」、金は「白」、水は「黒」が割り当てられているため、縞糸はこれらの5色を採用した。また、経糸には日本の伝統的な縞模様 frequently に用いられている藍色を基調とした。

特徴としては、経糸を藍色と白色の2色から構成し、これまでのやまぐち縞と比較すると、経糸に用いた色は少なく、細い線をリピートさせる単調な縞柄である。

また、「青」「赤」「黄」「白」「黒」の5色を3cmピッチで繰り返し一枚の生地を織りなした。この試みは、久留米紺の生地を織る職人にとっても初であり、経縞よりも緯縞が強調される織物を完成させた。やまぐち縞raita、やまぐち縞takijimaは5色展開であったが、やまぐち縞cosmoは「青」「緑」「赤」「黄」「白」「黒」「cosmoファイブ(5色ミックス)」(図12)の7色展開で生地を制作した。

2) モンペッコやまぐち縞cosmo

モンペッコやまぐち縞cosmo(以下、モンペッコcosmo)は、農作業着と日常着の両面を確立させつつ、幅広い年齢層に対応するため、アジアの伝統衣装であるサルエルパンツに多く見られるゆったりしたシルエットを目指した(図13)。モンペッコcosmoのシルエットは、欧米の体にフィットしたものではなく、「陰陽五行思想」は東洋の思想であることから、体のラインを見せないゆとりのあるものにした。

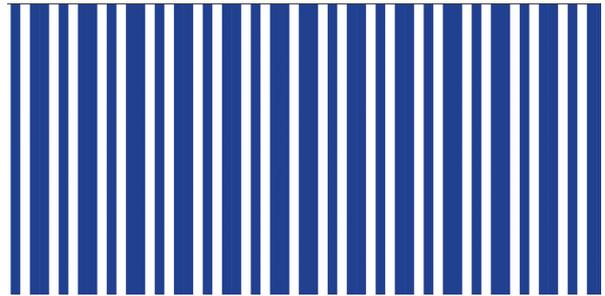


図 11.やまぐち縞cosmo2016



図 12.モンペッコcosmo/cosmoファイブ



図 13.モンペッコやまぐち縞cosmo

また、モンベの伝統的パターンを継承するという点において本来、袴を簡易にしたパターンから生まれたということから、これまでのモンベッコのパターンと同様、脇は直線立ちにした。

膝から足首にかけてストレートなパターンで、腰回りにもゆとりをもたせたワイドなシルエットが特徴である。

改良点として、ゴムの裁ち切り寸を2cm長くすることにより、容易に裾をたくし上げることが可能にした。また、モンベッコtakijimaで採用していた2.5cmのウエストゴムの幅を1cm太くすることで、携帯等の重みのあるものをポケットへ入れても、ウエスト位置がずれたり、下がったりしないようにした。

ポケットの位置については、屈んだり開脚したりなどの動作を繰り返し行い、ポケットに物を入れても動作に差支えないよう、モンベッコtakijimaの位置よりも1cm下げた。これまでのモンベッコと比較すると、ポケットに物を入れた状態でも、生地の上ツパリ感はなくなった。

2.5 mompekko2017

PhotoMusicの色彩的なエフェクトを用いて、やまぐち編Nagato2017（以下、やまぐち編Nagato）を制作した（図14）。

1) PhotoMusicについて

PhotoMusicは、画像の配色から音楽を自動生成して、画像と音楽が連動したスライドショー動画を制作できるPC向けのソフトウェアである。

PhotoMusicでは画像1枚から1つの図形楽譜に変換され、図形楽譜から音楽が生成される。したがって、画像が変わると音楽も変わるため、画像と音楽の切り替え時のタイミングは完全に一致する。画像の表示時間の伸縮に合わせて、音楽のテンポも自動的に調整さ

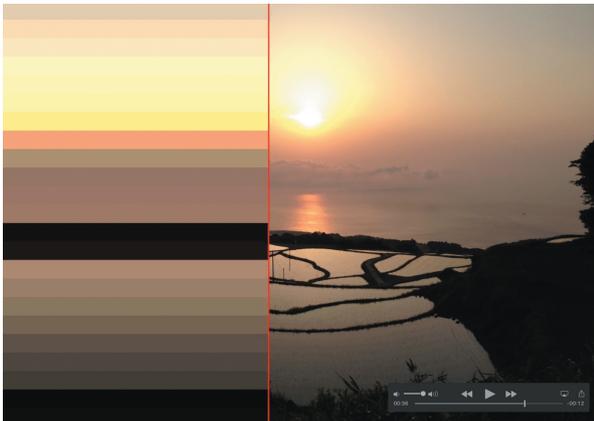


図 14.PhotoMusicでのデータ変換

れる。

画像は赤、橙、黄、緑、青、紫、灰の7色に分解され、7つの楽器（音源）と対応している。初期設定では色彩遠近法を参考に行っている。色彩遠近法とは、刺激の強い暖色系（赤・橙・黄）が前方に、刺激の弱い寒色系（青・紫）が後方に感じる知覚現象を利用した遠近法である。

色の刺激の強さに合わせて暖色には摩擦刺激の強い弦楽器系、寒色には摩擦刺激の弱い木管系を選択している。結果的に、弦楽器が前方、管楽器が後方という、オーケストラの楽器配置に近い編成となり、視覚と聴覚の遠近感が連動して相乗効果をもたらす。ただし、楽器やビート、テンポ、各種のパラメーターを変更することで、より多様で自分の感覚に合った音楽を作成することができる。

最初に、画像は縦が音階（2オクターブ、24分割もしくは4オクターブ、48分割）、横が拍子（4小節、16分割）に対応した7色のモザイク画像に変換される。そしてモザイク画像から色分けされた図形楽譜に変換され、音楽が生成される。図形楽譜は、音を視覚的に表現しているため、音楽の特徴の直観的な理解を促す。また、生成された音楽から画像が想起される。さらに、画像の色彩的特徴からエフェクトを自動生成し、今までにない画像、色彩、音楽を組み合わせた多彩なスライドショーを制作することができる。

ソフト開発にあたり、音から色が見えたり（色聴＝color hearing）、色から音が聞こえたりする（音視＝tone seeing）などのような、感覚器官と知覚が交錯する現象である共感覚の原理を応用し、異なる知覚の変換と連動による新しい知覚と表現の開拓を目指した。共感覚は、先天的に与えられたもののみが体験できる特別な知覚現象である。芸術の歴史においては、カンディンスキーやオリヴィエ・メシアンのような芸術家が共感覚者とされ、イメージと音楽を交差させる表現を行うことで影響を与えてきた。

興味深いのはこのソフトを使っていくと、使用した画像だけではなく、実際の風景からも音楽が聞こえるような錯覚が起こることである。それは後天的共感覚といえるだろう。また、デジタル画像は物質性がないので、触ることができない。しかし、色よりも触覚的な音に変換することで、デジタル画像を「触る」というような感覚が起きることも、このソフトが未知の知覚を開拓している証拠になっている。つまりスライドショーの探求は、知覚の境界の探求でもある。

そして、写真から連動する音楽を容易に作れるため、



図 15.Tanada E

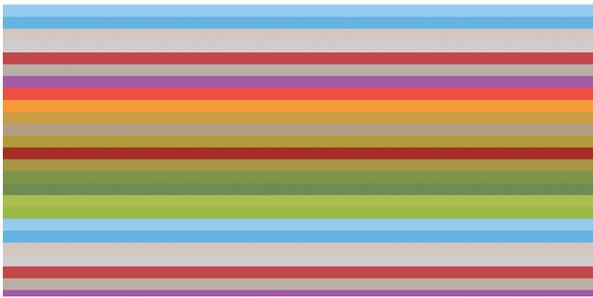


図 16.Motonosumi A

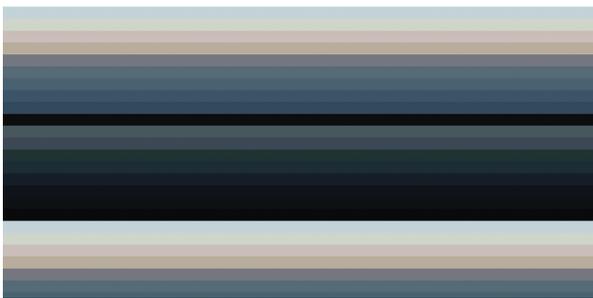


図 17.Tanada N

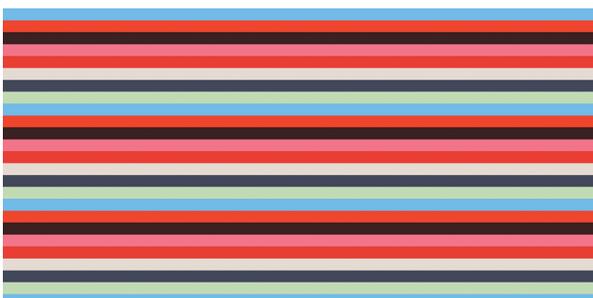


図 18.Motonosumi T

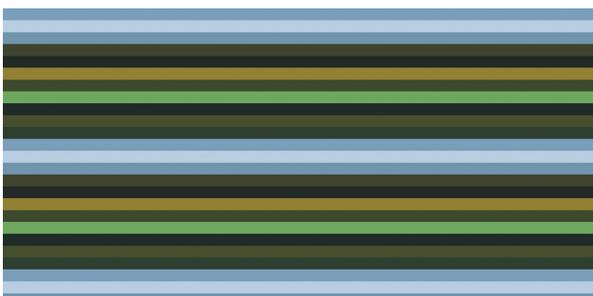


図 19.Tanada D

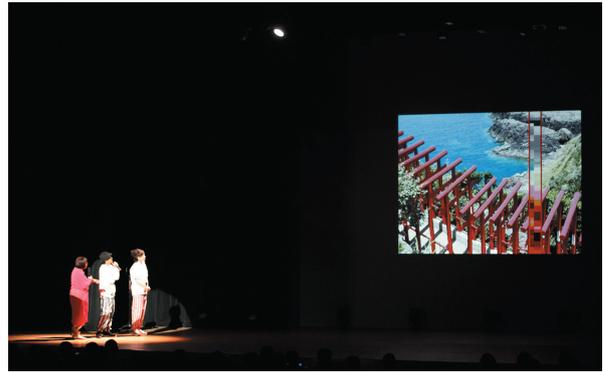


図 20.ファッションショーでのスライドショー

スライドショーという静止画と動画の中間領域の表現の可能性を広げているといえる。

2) やまぐち縞Nagato2017

山口には、素晴らしい風景がたくさん存在しており、棚田などは文化的景観であると同時に、景観資産であるといえる。モンペッコは、田植え用のモンペであるが、若者も好んで着られるようにファッション性を重視している。今回は東後畑棚田の日中・夕日・夜と元乃隅稲成神社の全体風景・鳥居を撮影し、PhotoMusicという画像の配色から音楽を生成して、スライドショー動画を作成するソフトのエフェクト機能を用いて、やまぐち縞Nagatoを制作した。それぞれのテキスタイルの名前を記号で単純化させ、Tanada E (Evening) (図15)、Motonosumi A (All Landscape) (図16)、Tanada N (Night) (図17)、Motonosumi T (Torii) (図18)、Tanada D (Day) (図19)とした。そして、ファッションショーでスライドショーとともに鑑賞することで(図20)、景観資産から芸術的価値を生み出し、感覚機能で体感させることを試みた。

PhotoMusicは、画像から図形楽譜を生成するにあたり、縦24分割もしくは48分割、横16分割の格子が作られる。格子におけるマスは、そこに含まれている画素から代表色が抽出して塗りつぶされるため、画像は粗いモザイク画像に変換される。

各マスに含まれる画素から代表色を選ぶにあたり、R、G、Bごとに最頻値を出して、掛け合わせている。平均値で代表色を抽出すると、元画像よりも彩度が低くなる傾向があるが、最頻値の場合は、彩度が高くなる傾向がある。

最頻値のモザイク画像は、さらに赤、橙、黄、緑、青、紫、灰の7つの色に分解され、7色のモザイク画像になる。そこから音符にする色としない色を選別させて、図形楽譜を生成する。

やまぐち縞Nagatoでは、東後畑の棚田などの風景写真をPhotoMusicに取り込み、最頻値のモザイク画像の縦列の配色から、風景を連想させるようなイメージを選択し、縞パターンにした。PhotoMusicには、モザイク画像の列を使って、左から右に順番に異なるストライプ状の配色に変化するエフェクトがあり、それが縞パターンに応用できると判断した。縦24分割程度のストライプは、ちょうど適していたといえる。それは、画像と図形楽譜の中間にあたる配色のデザインであり、色彩的要素を音楽的要素の両方が含まれている。近年、三宅一生のように、風景写真から配色を抽出して、服飾のデザインに取り入れる動きはある。しかし、風景写真から抽出された配色が音楽と服飾の両方に展開される試みは初めてではないかと思われる。もともと、日本の服飾の配色は、平安時代の襲の色目のように、季節や自然を反映させる文化が存在しており、実際、天然の染料や顔料から色を抽出していたこともあって、服もまた自然と呼応するようになってきたと考えられる。

そのことから、田植え仕事の衣装に機能だけではなく、ファッション性を持たすために作られたmompekkkoにおいて、自然の風景の配色をデザインに反映させるという発想は「自然」であったと思われる。しかし、かつてのように、染料・顔料など天然素材からしか色を抽出できなかった時代ではなく、風景写真からそのまま色を取り出せる今日の色彩環境が反映されているといえる。やまぐち縞のデザインが、デジタルデータを作成して、プリントすることからそのことが裏付けられる。

また、風景の配色が服飾のデザインとなり、もう一方で音楽になるということは、色の新たな可能性を開くことになったといえるだろう。今回制作した縞パターンを見て、音楽を想起する人はほとんどいないと

予想されるが、指摘されれば風景を想起できる人はいるだろう。

さらに、PhotoMusicの素材となった山口の風景写真を使って、PhotoMusicで音楽を制作している。PhotoMusicは、音楽家としての鍛錬を受けたものならば、より複雑で高度な表現が可能である。画像と音楽が連携したスライドショーだけではなく、ファッションが加わった新たな複合的表現は新たな相互作用を及ぼし、表現領域をさらに拡張したといえる。

山口の風景写真から、PhotoMusicを使って、音楽だけではなく、服飾にも展開し、新たな表現とプロダクトを生むことができた。それは景観資産から、芸術的価値を生み出す一つの試みとなったといえる。ここで重要なのは、写真という簡便で汎用的なメディアを使ったということであろう。さらに、そこに含まれる色を抽出することで、音楽や服飾に変換できるようになり、見る、聴く、触る、着るなど感覚機能を通じて総合的に味わえるようになった。観客の反応もよく、今後の地域の資産を有効活用する上で新たな可能性を示すことができた。

3) モンペッコやまぐち縞Nagato

モンペッコやまぐち縞Nagato（以下、モンペッコNagato）は、サービスデザインの手法の一つであるService design Prototyping System（以下、SPS）を用いて、開発を行った。新しいモンペッコの開発のために、これまでのモンペッコの検証も行った。SPSでは田園や電車の中など様々なシーンでのロールプレイングを行なった（図21）。ロールプレイングをしながら、気づきや改良点などを付箋に書き込み、新しいモンペッコのアイデアを創出した（図22）。

これまでのモンペッコのシルエットに対して、より動きやすさを重視した。さらに、モンペッコtakijimaより足元はゆったりさせつつも、モンペッコcosmoよ



図 21.SPSによるロールプレイ



図 22.アイデア抽出



図 23.モンペッコNagatoの着用①



図 24.モンペッコNagatoの着用②

り細身を目指した(図23、24)。

3 やまぐち縞テキスタイル活用事例

3.1 zero wasteに向けた商品開発

やまぐち縞takijimaの生地からモンペッコ商品の製産段階で発生する端切れを、縫製会社である合資会社ロォーリングと匠山泊に保存するように依頼した。そして端切れの形状を活かした商品開発を試みた。

1) 手ぬぐい

1つ目はセルビッチを活かした手ぬぐいである。端切れの中でも、セルビッチ付きのものは長短がまばら



図 25.手ぬぐい



図 26.ソファクッション

であるが、一般的な手ぬぐいの長さである90cm強のものが多くあったため、手ぬぐいを考案した(図25)。幅も約5cmと晒生地の一部にセルビッチ付きの端切れを巻き縫いすることで単に端切れを使用するよりも付加価値をアピールできる。また、モンペッコの販売時に生地からオリジナルデザインで製産していることなども説明しやすくなった。

2) ソファクッション

2つ目はモンペッコtakijimaよりXLサイズを製産したが、試験的に発注したため数量は少なく、裁断の取り合わせは半端で大きな端切れが発生した。しかし、下関にあるUZUハウスのロビースペースに置くソファクッションのデザイン注文の依頼があり、端切れサイズはクッション用に適切なサイズであったため、デニムと組み合わせて制作した(図26)。

3) ヘアアクセサリ

3つ目はヘアアクセサリなどの小物である(図27)。これらは小さいもので3cm角の端切れで製産できることから多量に製産できることが利点である。また、やまぐち縞takijimaの生地は縞の取り方によって表情が異なる商品が可能となること小さなヘアアクセサリでもバラエティのある商品展開となった。



図 27.ヘアアクセサリ



図 28.オーナメント

4) オーナメント

4つ目は展示販売会などでの装飾に使用するオーナメントである(図28)。端切れの中に三角形のものがああり、その形状のままを利用できた。やまぐち縞takijimaの色柄を繰り返し使用することで、遠距離からでも、mompekkoの販売場所であることは一目瞭然となる。オリジナルデザインの生地ならではの活用方法である。

このように端切れを活用することで、オリジナル生地の付加価値を高め、生地ありきの商品展開が浸透していけば、テキスタイルへの関心もさらに高まることが期待される。また、小物商品の開発への可能性も十分ある。



図 29.ユニフォーム姿のレノ丸



図 30.デザイナーイラスト



図 31.デザイン画



図 32.アイテム画

3.2 レノファ山口FC公式キャラクター「レノ丸」衣装

原田株式会社との共同研究により、山口県初のプロサッカーチームレノファ山口FCの公式マスコットキャラクター「レノ丸」の衣装制作を行った。

原田株式会社は山口県内のユニフォーム販売会社でありながら、レノファ山口とマスコットキャラクター事業の総合プロデュース契約をしている。レノファ山口FCのグッズをはじめ、官公庁のほか、プロ野球チーム「広島東洋カープ」のヘルメットなどのグッズを製作販売している。

今回の衣装は10月末に開催するホームゲームでハロウィンバージョンとしてのコスチュームである。レノ丸の試合ユニフォームとは異なる初めての衣装である。

1) レノファ山口のマスコットキャラクター「レノ丸」

レノファ山口FCの公式マスコットキャラクター「レノ丸」は、ホームゲームやイベントなどレノファ山口を盛り上げる活動を行なっている。山口県は明治維新ゆかりの地であり、維新の志士として高杉晋作や久坂玄瑞などが挙げられる。この「志士」と「獅子(ライオン)」をかけて誕生したのがレノ丸である(図29)。

Jリーグマスコット総選挙2017では、49チーム応募の中、初登場3位を獲得するなど、Jリーグのマスコットキャラクターの中でも大変人気がある。これまで「レノ丸」を用いたクリアファイルやマグカップ、ボールペンなど数多くのグッズが販売され、展開してきた。



図33.試合会場での様子



図34.ハロウィンバージョンのレノ丸

2) ハロウィンバージョンの衣装

レノ丸のキャラクターデザイナーによるハロウィンバージョンのイラストを元に、デザインを考えた(図30)。まず、魔法使いの衣装についてリサーチし、当研究室でしか作ることのできない衣装は何かを思案した(図31.32)。魔法使いといえば黒いマントに先の尖った黒い帽子が連想されるだろう。しかし、ただ黒い生地で作製しただけでは、他のハロウィン衣装との差異化は図れない。そのため、黒いマントには、レノファ山口のキーカーラーであるオレンジを裏地に使用し、表にはオリジナル生地のやまぐち縞raitaを活用した。また、帽子はレノファ山口のエンブレムを取り入れ、独自のものを完成させた。

やまぐち縞raitaの経糸にはオレンジの糸が使われているため、ハロウィンの衣装としても、レノファ山口の衣装としても馴染みやすい生地であった。

3) 試合での着用と反響

2016年10月30日に維新百年記念公園にて開催されたホームゲーム戦にてハロウィンの衣装のレノ丸を初披露した(図33)。レノファ山口のファンだけでなく、アウェイチームのファンも一緒になり、写真撮影のために長蛇の列ができるほどの反響があった。ツイッターなどのSNSにも多く掲載され、レノ丸の他のバージョンの衣装を望む声も多く挙がった。

やまぐち縞raitaを用いることで、唯一無二の衣装を製作することができた。また、正面から見た際に顔まわりやセンターにやまぐち縞raitaで縦ラインを作ることによって、華やかさを演出した(図34)。

今後も地域資源ややまぐち縞というオリジナル生地

を活用しながら、キャラクター衣装のオリジナル性を追求していきたい。

3.3 SGFWS2017について

スーパーグローバル・ファッション・ワークショップSGFWS2017(以下、SGFWS2017)は、2016年度からやまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会が公益財団法人東芝国際交流財団の助成事業に採択されて実施しているものである。海外の大学から教員及び学生を招聘し、4日間のワークショップで服飾デザインを行い、ファッションショーにて披露する。言葉や文化の壁を越えて、日本の自然や生活文化を理解し、多様な文化背景の若者の共創によって、新たな服飾デザインを開拓することを目的としている。今回は、フィンランドのラップランド大学、アメリカ合衆国のハワイ大学マウイカレッジ、本大学の学生と教員16名で共創した。ワークショップのテーマは、アグリアート・フェスティバル2017のテーマと同様、「水の力 The Force of Water」で行なった。

1) ワークショップのプロセス

本ワークショップでは、体験学習やサービスデザインの手法を通じて、服飾デザインを行う。体験学習及びフィールドワークとして、5ヶ所の施設を訪問した。まず、現代を代表する数寄屋師の山本隆章氏が造った茶室(聴松庵)のある数寄屋建築の古民家を見学し、茶室空間を学んだ。次に、江戸時代に建てられた国登録有形文化財の清水家住宅主屋にて、防府市地域おこし協力隊の指導のもと藍染体験した。さらに山口市徳地の重源の郷にて紙漉き体験を行い、徳地手漉き和紙



図35.ディスカッションの様子



図36.ムードボード



図37.パターン制作



図38.作品制作

について学びを深めた。大内時代に建立され、国宝に指定されている瑠璃光寺五重塔を視察後、山口駅周辺にあるプロジェクト型ファッションブランドの匠山泊を訪問した。山口県は全国で唯一デニム製品の加工を地域産業資源に認定しており、匠山泊の「Re維新」という高品質のジーンズは2016年度に山口県特産品振興奨励賞を受賞している。豊かな経験や技術を持つ職人がいる匠山泊は、海外ゲストの関心が極めて高かった。

デザインの発想方法としては、グループ毎にテーマを設定し(図35)、ペルソナを設定後、ムードボードを作成した(図36)。次に、ドローイングを行い、プレゼンテーションを通じて意見交換後、デザインを決定した。テキスタイルや素材作りを同時に進行させながら、制作を進めた(図37、38)。

2) 制作条件

条件として、決められた生地の中から制作を行なった。各チームに与えられたのは、デニム(150cm幅2m)1枚、やまぐち縞cosmo黒(110cm幅1m)1枚、ダブルガーゼ(1.1m四方、藍染加工)1枚、徳地手漉き和紙(横60cm縦90cm)1枚、やまぐち縞cosmo端切れである。

3) 各チームの作品

チーム1は、「surfer/wave」をテーマにサーファーガールをイメージして作品を作った(図39)。藍染の生地は、白い斑点が魚の魚群や大きな魚として捉えることができる。また、背中側の大きなやまぐち縞cosmoの柔らかな風合いが、海にゆっくりと漂う波を表現している(図40)。タイトルは、「Ke Kai(ハワイ語で波)」。

チーム2は、「Eye of Typhoon」をテーマ及びタイトルとして、台風の日に生まれた少女が自然を愛する姿を想像して制作した(図41)。自然の象徴として、やまぐち縞cosmoの端切れを用いて鳥を制作し、少女独自の世界観をファッションショーでは演出した(図42)。

チーム3は、「Balance」をテーマ及びタイトルとして、水がもたらす自然災害の恐ろしさと生き物への恵みという相反するものの共存としての緊張感を表現



図39.「Ke kai」正面



図41.「Eye of Typhoon」正面



図43.「Balance」正面



図40.「Ke kai」背面



図42.「Eye of Typhoon」背面



図44.「Balance」背面

した(図43)。ジャケットのやまぐち縞cosmoや、ワンピースはアシンメトリーにすることで、変動し続ける水の流れを再現した(図44)。

以上の通り、「水の力 The Force of Water」という共通テーマでチーム毎に解釈し、4日間という短い期間で制作を実現した。やまぐち縞の活用の仕方も様々で、作品全体に使うチームもある一方で、袖口などにアクセントとして使うチームもあった。元来、経縞の織物として作っているが、横づかいをするなどして、固定概念にとらわれず、服飾デザインの表現に挑

戦していたようである。

4 モンペッコ活用事例

4.1 モンペッコマーケティング

モンペッコの販売は、有限会社ナルナセバを販売元とし、2014年よりアグリアート・フェスティバルでの各年のモンペッココレクション発表直後からロビーでの販売を実施している。このロビー販売では毎年特別価格を設定し、ファッションショー内でも販売案内のアナウンスをするため、ある程度の販売実績はあ

その他、東京代々木上原のCASE galleryにて同年2月に展示販売会も行った(図47)。この時の展示販売会を機に、富山県のデザインショップバイヤーの目に留まり、チリングスタイルという北欧雑貨店での委託販売も実現した。一方で海外では、同年11月にフィンランド国立ラップランド大学内にあるArctic Design Shopにて商品展示を行ない、試着室を設け、モニタリングの実施に成功した(図48)。翌2017年2月にはフィンランドロヴァニエミ市内で開催されたArctic Design Week2017内で「Dialogue with Nature」と題して、山口県内の作家作品、山口市商工会議所会員の商品などと共にmompeikkoの展示も実現した。この展示の派生としてポップアップショップをロヴァニエミ市内にあるTaito Lappi(ラップランド手工芸組合の運営する店舗)にて期間限定でオープンした。こうしてフィンランドにも販路を拡大できた。今後の課題としては、ウェブサイトの更新、オンラインショップでの英語対応が必要である。また一般顧客のみでなく、農業団体、飲食店などへのユニフォームとしての提案営業も取り組む価値はあると考える。

4.2 野点衣装としてのモンペッコ

東後畑の棚田ブランディングの一環として、棚田における野点を実施し、そのための衣装としてmompeikkoを活用した。海に面し、豊かに成長した稲穂である棚田の美しい景観の中で、自然と一体化するために、陰陽五行の思想を用いた演出を行うことにした。

元来茶の湯の道具作りや点前のプロセスには、陰陽五行説が基盤になっている。そこで、やまぐち縞cosmoも同様の思想に基づいてデザインされているために、野点による空間の演出、点前、そして衣装について関連性を持たせて演出することが可能となった。

以下では実際に行った野点について、企画空間と具体的な実施内容について報告する。

1) 新様式野点

2017年10月20日に、野点「点空ノ茶会」を実施した(図49)。野点といっても新様式の野点である。新様式とは茶室以外の場所で行う約二畳の空間における茶会とここでは定義する。人、物、環境によってその演出は変わる。「点」はここに在ることを意味し、「空」(くう)は天を表す。自然と一体化する、天・地・人の関係を稲刈り直前の棚田の中に作り、陰陽五行思想を道具によって配置し視覚化した(図50)。空間は二畳とし、亭主と客1対1の関係を試みた。点前は



図49.東後畑棚田



図50.陰陽五行思想の視覚化



図51.モンペッコを着用した野点

道具に合わせた手順を作り、衣装は2016年に開発したモンペッコcosmoの中からcosmoファイブとアグリアート・フェスティバルTシャツを着用し野点を行った(図51)。

裏千家では、茶道とは、人と人との関わりを大切に「もてなしの文化」と言われている。そのために亭主が一服の茶を点てて客をもてなす中に、茶室や道具等において様々なしかけがなされており、茶道は流派を越えて五感で感じる総合芸術と考えられている。

その中に陰陽五行思想はあり、千利休は茶室空間を約二畳にまで小さくした。この単位は身分差を無くし、人と人との距離感や自然の気配を感じやすくするための究極の広さと解釈されたからである。今回は日本海へ広がる景観を活かしたもので、普段何げなく眺められている棚田の印象を変えることに成功した。

野点の源流をさぐると、千利休の時代には、戦国武将の鷹狩や戦乱に、茶人も同行し、その場の状況に合わせて茶を点っていた。現在一般的に周知されている野点といえば「立礼式」と呼ばれる椅子テーブル式であり、これらは裏千家十一代玄々斎宗室が明治5年の第1回京都博覧会において外国人の参加を考慮して考案したものである。後に、十四代無限斎好の立礼棚が多く使用されている。立礼式により正座から開放された結果、着物から洋装へと客のスタイルは変化した。現在も茶会では着物が多く着用されている。

2) 陰陽五行思想でつながる茶の湯とモンペッコ

陰陽五行思想とは、古代中国の易が起りであり、陰陽説と五行説が時代と共に1つになった思想である。陰陽は天地のあらゆる現象を2気に分け、それらが四象、八卦と分かれている。例えば茶の湯において、水は「陰」であり火は「陽」。陰陽の和合により湯が生じ、その湯で一服の茶が点てられる。利休居士道歌に「茶の湯とはただ湯をわかし、茶を点ててのむばかりなる事と知るべし」とあり湯相が大事であることがわかる。湯を作るための道具には、炭は「木」、火は「火」、灰は「土」、釜は「金」、水は「水」といった五行思想を反映しており、調和した宇宙がここにあると解釈する。

これらのことから、棚田における新様式野点において茶道具の陰陽五行思想を視覚化することやモンペッコを着用することで演出に意味をもたせた。

3) 具体的な実践事例

亭主と客共に、アグリアート・フェスティバルTシャツとモンペッコcosmo2016のcosmoファイブを着用した、1対1の野点を実践した。cosmoファイブは陰陽五行の5色の色を経糸に用いられているもので、世界の調和をデザインしたものである。

陰陽五行思想の視覚化としては、二畳の空間を稲穂で囲むように作り、亭主と客は、隣り合わせで北向きに座り日本海が見えるよう配置した。茶の湯では四畳半の茶室に陰陽五行思想を反映しており、その基本茶室構造において、客は貴人の場合は北に座し南に面する。亭主は南より北面して点前をすることになっている。

今回の野点では、棚田から海へと広がる風景を楽しむ設定にするために、両者を北向きに座る演出にした。畳を敷くことから目線を低くするピクニック的な要素を加え、両者から見える光景に拡がりを意図した。北方位は、八卦後天図において坎☵「水」を表す。道具においては、オリジナルの正方形の紙箱、黄色の茶箱を創作し、黄色の古帛紗、金色の水筒を用いた。黄色は五行において中央を表し、神の領域であるため使用されない色であるが、自然界への感謝の意味を込め用いた。結界（清らかな場所であることを示す）は、刈り取った稲を束ね見立ての道具とした。煙草盆（客に対しどうぞおくつろぎくださいの意味を持つ）は一升枡にした。茶箱、升ともに正方形を意識し、四方位を調和する形として用いた。方位を示すアイテムとして八卦の、坎☵：北、離☲：南をデニム生地に刺繍にした古帛紗創作し、その上で茶を点てた。四方位は四神で示し、北は玄武、南は朱雀、東は青龍、西は白虎で、これらを絵付けした豆皿を配置した。これらは亭主が北向きに点前をできない場合、方位を正すアイテムとして作ったものである。裏茶道千家奥秘の点前「行の行台子」では、亭主が北向きに座ることを示す道具として八卦盆を用いる。茶碗は亭主であるA氏は「水」をテーマに自ら創作したものを使った。

上記のように陰陽五行思想の視覚化や儀式的な要素を加えつつ、棚田を最大限に活かした新様式野点を実践することを可能にした。

4) まとめ

後日野点に参加した2名にアンケートとインタビューを実施した。両者ともに野点体験は満足であったとの回答を得た。理由としては、開放的な空間の中で、普段は出来ない初めての体験に新鮮味を感じたことや、野点を通して亭主と客の会話ははずみ、ただ座って風景を見るより、茶を点てるというやりとりがあることから新しい交流体験が創出され、棚田の風景に新しい体験価値を生み出す共創の役割を担った。亭主と客を体験した2人は道具や衣装を含めた空間演出の意図を理解し、伝統文化と自然を融合した空間を堪能したようだ。野点空間の創造により、農業のための田園空間に作られた空間は異化され、ある種の劇的空間になったことに要因しているからだろう。

以上のことから棚田における新様式野点は、これからの棚田のブランディングとして可能性があると考えられる。ここで衣装としてモンペッコcosmoを活用する事には意味があり、一体感や自然界にある陰陽五行思想へも触れることができる。茶道においても自然の中で

気楽に茶を点て楽しむことは、普及的活動になるだろう。2019年開催予定の棚田サミットや観光客、長門市の姉妹都市ソチ市（ロシア、クラスノダール地方）等の国際交流を視野にいたした時、棚田における新様式野点は、棚田という新たな地域資源を生かした道具が生まれる可能性もあり、文化的交流体験としても期待できる。

5 モンペッコからの派生による事例

5.1 田植えフェスティバルとモンペッコの活用

モンペッコの商品開発と同時進行で、実際にその着心地や実用性を確かめるとともに、若者へ農業の関心を高めることを目的に、2014年より、モンペッコをはいて田植えや稲刈りといった農作業の実体験を開始した（図52）。対象地域は、山口県一の米どころでありながら、過疎化・少子高齢化が進み、農業人口の減少が深刻な中山間地域・山口市阿東徳佐とした。事前調査の結果、一次産業の後継者不足の原因として、若者は農業に対して「きつい仕事」「それだけでは食べていけない」といったマイナスのイメージが強いことはわかっていたため、農業という“ビジネス”を、モンペッコを通してデザインし、地域を盛り上げることはできないかと考えた。

初年度は、同年5月徳佐にある築400年以上の空き家を再生させ、移住者の拠点・古民家再生のモデルハウスとして誕生した「旧山見邸田楽庵」前で、「田植えフェスティバル」を開催した。一般社団法人おんなたちの古民家との共催で、モンペッコ着用での一般参加も呼びかけたところ、地元農家、一般参加者など約20人が集まった。「農業×ファッション×古民家」をテーマにした初めてのイベントとして、マスコミの関心度も高く、ファッションナブルな衣装で女性たちが楽しく田植えをする様子は、新聞・テレビなどで数多く取り上げられた。地域を活性化する上で、マスコミ



図52.田植えフェスティバルの様子

をうまく巻き込み、まずは多くの人にその地域を知ってもらうこと、興味を持ってもらうことは非常に重要なファクターとなってくる。

農家の方にも、日ごろの農作業着ではなく、開発したモンペッコを着用して田植えをしてもらった。近年は機械化が進み、手植えをすることはほとんどなくなったそうだが、イベントでは全員が昔ながらの手植えに挑戦した。約100メートルの距離を一列になり「美味しくなあれ」の掛け声でスタートした。農家の方々にとって、日ごろは重労働だという農作業も、おしゃれな衣装を着用しただけで「気分が上がる」との声は多く、「ポケットは前についていて便利」といった機能性に関する声も聞かれた。

空間全体の統一感をもたせるため、参加者全員にモンペッコを着用してもらった。山口市にある桑田製帽所の協力で、オリジナルの巨大帽子も人数分そろい、カメラで撮影した時には、古民家がバックとなりその前の田にモンペッコガールが並ぶことができた。普段は静かな里山空間を華やかに演出した。地域住民には、事前告知していたため、色とりどりの服装で農作業をする様子を一目見に、近所のお年寄りも多数集まり、田んぼのあぜに腰掛けながら楽しく団らんする様子も見られた。このイベントは、地域活性化の第一歩となったと考えられる。

継続の重要性を考え、4年間、同じ徳佐の田んぼで、モンペッコをはいて、5月に田植え、9月に稲刈りフェスティバルを開催した。2015年には、山口市長、長門市長、2016年には山口県知事、高島屋のバイヤーなども参加し、山口県も注目する一大イベントへと成長した。また、参加者も年々増えており、今では山口県内だけでなく、大阪、京都、東京、四国などから合計100~200人に及んでいる。「女性たちがおしゃれをして農業を楽しめるイベント」として、参加者はフェイスブック、インスタグラムといったSNSで、その様子を発信している。ファッションショーとの相乗効果もあり、モンペッコは全国に発信されるようになった。

5.2 モンペッコを着て作った「田楽米」

2014年、中山間地域の活性化を進める一般社団法人おんなたちの古民家の理事であり、商社経験のある原亜紀夫氏の発案で、田植えと同時に、モンペッコをはいて植えた徳佐の米をブランド米にするプロジェクトをスタートした。このプロジェクトには、当研究室のほか、地域の衰退を危惧する同地区自治会長の山見智

盟氏、定住コンシェルジュの田村哲信氏も加わった。農業の魅力を高め、地域に人を呼び戻すため、「売れなくてもいいから東京の高級百貨店に山口県の米を置いてもらうこと」を目標にした。

農家と相談し、米に付加価値をつけるため、安心安全な減農薬・有機農法、さらに手間暇かけて天日干しする「はぜかけ」に挑戦した。山口県のエコ山口50の認定をもらい、特別栽培米として秋には一等級のコシヒカリを収穫し、これを「田楽米」と名付けた（図53）。米のおいしさ・食味値等が評価され、2015年2



図 53.田楽米



図 54.モチペッコ



図 55.sou café

月、贈答品として桐箱にいれた「田楽米」は高島屋本店である日本橋店に、2キロ5000円という日本一の価格（当時）で棚に並べられた。“山口県の米は美味しい”というイメージを東京の消費者に与える戦略でスタートし、2015年より3年間、高島屋玉川店で「田楽米フェア」を開催してもらえるようになった。

5.3 米を使った山口県6次産業認定スイーツ「モチペッコ」の誕生とカフェペッコ

田楽米のブランディングと同時並行で、米の加工品を作り消費量を上げようというプロジェクトも始動した。2014年より、洋菓子製造会社「有限会社ロイヤル」の協力の下、米の加工品の試作は次々とあがってきた。1回目の試作会を開催し、地元農家、行政、市議会議員、マスコミなど10人が田楽庵に任意の審査員として集まってきた。山口県を代表する製菓をつくることを目的に、真剣な意見交換が行われた。これらの意見を参考に、さらなる試作・商品開発は進み、9月に5種類のお菓子が出そろった。安倍昭恵氏、行政、地元農家ら10人の審査員による審査の結果、「田楽米」の加工品として、餅と餡をパイ生地地で包んだ菓子が選定された。このスイーツは、山口県6次産業認定商品に選ばれ、「モンペッコをはいて植えたお米のお餅のお菓子」ということから「モチペッコ」と命名した（図54）。2014年より、開発者のおんたちの古民家が中心となり、高島屋新宿店、阪急うめだ本店、ジェイアール京都伊勢丹、博多阪急の催事に出席し、モンペッコをはいて販売した。阪急うめだ本店では1週間で8000個を販売するほどの人気ぶりだった。

2016年1月には、モチペッコ専門店のカフェとして宇部市に「カフェペッコ」はオープンした。同年4月には本大学の食堂での販売もはじまった。現在モチペッコは、下関市の「晴ル家」、山口市の「sou café」（図55）、広島県の「カフェペッコ FUKUFUKU」でも販売されており、山口県の新たなスイーツとして少しずつ認知されはじめてきた。

6 おわりに

以上において今後の課題を明らかにすることを目的として、2013年から2017年まで継続して実施してきた農ガールコレクションにおける創作活動を概観した。農ガールコレクションとしては、農作業着であり街着あるいはその他のライフステージにおいても活用できるモチペッコおよびサロペッコとツナギッコを商品開発し、少量だが販売することで、一定の評価を得るこ

とができた。

実験段階を経たので、今後は全国の農業女子を中心に普及させる方法をより具体的に進めて行く必要がある。そのためには、ファンドは必要でありクラウドファンディングなどを活用して、多くの人々に訴えていけるように工夫をしたい。

mompekkkoのデザインは作業着のデザインという制限にとどまらない。地域の農業振興や地域活性化を目的としており、衣服のデザインから地域デザインへと展開させてきた。その1つは食のモチベッコである。田園における新たな空間の発見あるいは創造については、自然と共生する茶の湯の会がある。

産業としての農の活性化はもちろんだが、農業文化の活性化をも目的としており、今年のアグリアート・フェスティバル2017においては、「棚田数え唄」を油谷の年配者や子供そして山口県立大学の学生と一緒に演じた。かつて農業を通じて地域コミュニティが機能し、伝統文化は親から子へ、そして孫へと継承されていた。

しかし、農業従事者の減少や、機械化により子供たちは農業を手伝うこともなくなってきて、人々の生活文化との関わりは減りつつある。そこで、この棚田数え唄の公演は有意義であった。

最後に今後の課題として、農業文化の発掘と継承を視野に入れた新しい地域文化の創造がある。また、農作業着は機械化によって、その機能は変更されてきているので、地域発の服飾文化として新しい意味をもった衣服の創造と活用について考えて行く。

敢えて伝統の縞柄を継承すること、足首にゴムを入れて昔のモンベのスタイルをディテールに取り入れることで、日本の農業とともにあった生活スタイルや機能性また美しさなどを表現していきたい。

また、新しいテクノロジーを取り入れることで、ユニークな発想法にて生地の開発を継続させて行きたいと考えている。2014年から3年間、生地から織って開発してきたが、織りロットが大きいために困難なこともある。2017年版の場合には前述したように、プリントにより縞柄表現を行った。

この後はそれぞれの長所を活かしながら、開発を継続させていきたいと考えている。

□参考文献

- 水谷由美子 小田玲子 荒木麻耶 「産学公連携による農作業着モンベッコとツナギッコの商品開発：アグリアート・フェスティバル2016を事例として」『山口県立大学学術情報』第10号 2017年、35-57頁。
- 水谷由美子 小田玲子 甲斐少夜子 原田章子 「地域創生への服飾デザインからの挑戦：長門市油谷の棚田ブランディングと農作業着モンベッコの商品開発を事例として」『山口県立大学学術情報』第9号 2016年、41 - 80頁。
- 水谷由美子 甲斐少夜子 小田玲子 「地域資源を活かした農ガールファッションの商品開発とサービスデザイン：アグリアート・フェスティバル2014『大地の心をきく』を事例として」『山口県立大学学術情報』第8号 2015年、45 - 70頁。
- 水谷由美子 安倍昭恵 武永佳奈 水津初美 「モンベとサルツパカマをリデザインした農作業着の服飾デザイン：「農業スタイルコレクション2013 in 長門油谷with会津若松」を事例として」『山口県立大学学術情報』第7号 2014年、27 - 49頁。

□図制作・撮影者リスト

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 図1～6,8,10,12,13 | 志賀敏彦
(Baku PHOTO OFFICE) |
| 図7 | 水津初美 |
| 図15～19 | 棟久佑子 |
| 図14 | DOZAN11/三木学 |
| 図20,23,24,39～44 | 貝崎健/高木敦志 |
| 図11,21,22,27,28,31～34 | 荒木麻耶 |
| 図9,25,47,48 | 甲斐少夜子 |
| 図26 | UZUハウス提供 |
| 図29,30 | 原田株式会社提供 |
| 図35～38,49～52 | 原田章子 |
| 図45 | 加藤史織 |
| 図46 | 日本百貨店提供 |
| 図53～55 | 株式会社Archis 提供 |

付録：

アグリアート・フェスティバル2017「水のカ The Force of Water」プログラム

アグリアート・フェスティバル 2017

「水のカ The Force of Water」

2017

10|29[日]

ルネッサながと

13:00～ロビー展示・販売

14:30 開場 | 15:00 開演

【ゲスト】 藤井 リナ | 藤田 富 | 濱田 ここね |
DOZAN11《友情出演》

【企画運営】 安倍 昭恵 | 水谷 由美子 | 荒川 祐二 |
山口県立大学企画デザイン研究室

【主催】 アグリアート・フェスティバル 2017 実行委員会

【共催】 やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会
公益財団法人東芝国際交流財団

農ガールコレクション
農業文化 地域文化
創造の祭典



あいさつ

安倍 昭恵

《実行委員会名誉理事長 内閣総理大臣安倍晋三夫人》



「水の力 The Force of Water」

水は大地のいのちの源であり、あらゆる生きものと同じく人も水がないと生きていけない。以前、光のイメージについて聞かれたとき、私は水に映る太陽の光だと答えたことを思い出す。人間も70%が水、きれいな光を写し出せる人でありたい。人の心と同じように、海の水は小波がたったり、時に荒れ狂ったり。津波や水害に苦しめられることもあるが、水はやはり人にとって何より大切なもの。だからこそ各地に龍神が祀られ、人々は祈ってきたのだろう。水は渦も作り出す。渦に飲み込まれるのではなく、新しいものを生み出す渦を作っていきたい。人間は水。水は人の心を写し出すもの。

江里 健輔

《実行委員会理事長 公立大学法人山口県立大学理事長》



長門市、山口県の自慢の一つが地元の人々が丹精込めてつくられた棚田です。秋になると棚田は黄金色に染められ、陽を浴びて、きらきら輝いてきます。この輝きを受けながら、アグリアート・フェスティバル2017が「水の力 The Force of Water」と題して開催されます。

今回も様々な団体からの支援を頂き、盛り沢山のプログラムが組み込まれています。中でも、本学の教育理念の一つである「国際化への対応」の更なる深化を求めて、フィンランドのラップランド大学や新しく学術交流校となったハワイ大学マウイカレッジとの共同研究である服飾デザインの成果も報告されます。

棚田の命は「水」です。この半島には雨乞山があるように、先人達は「水」確保のために祈願するなど、並々ならぬ苦労を重ねてきた歴史があります。それらに思いを馳せながら、アグリアート・フェスティバル2017を楽しんで頂きたく期待申し上げます。

大西 倉雄

《実行委員会理事 長門市長》



このたび「アグリアート・フェスティバル2017」が安倍昭恵内閣総理大臣夫人をはじめ、多くの方々のご尽力により、ここ長門市で盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。

長門市では、平成31年度全国棚田サミットの開催も決まっており、農村の美しい原風景を残している棚田を取り巻く環境をもっと盛り上げていきたいと思っております。そのサミットにおいては、新しい取り組みとしての農泊や、自然栽培米、またこのアグリアート・フェスティバルとコラボさせて、中山間地域における農村の未来の懸け橋となるよう、期待しているところです。

本フェスティバルのご成功と、本日お集まりの皆様方のご健勝を祈念申し上げ、お祝いのことばとします。

水谷 由美子

《実行委員会委員長 公立大学法人山口県立大学国際文化学部長・教授》



5回目を迎えるアグリアート・フェスティバル2017「水の力 The Force of Water」は、今年も地域の農業文化振興と農ガールコレクションの発信を目指して開催されます。長門市×安倍昭恵夫人×山口県立大学（企画デザイン研究室）を企画・運営の核として、芸能関係機関、ジャポニスム振興会、地域の農業関係機関、アパレル企業・研究機関、手工芸団体さらに県内高等学校などの参加を得ています。

昨年からの国際交流も一つの柱となってきています。今年は長門市とソチ市との交流が始まり、企画デザイン研究室はロシアからの学生訪問団43名との交流会を長門市とともに実施しました。公益財団法人東芝国際交流財団の支援で山口県立大学と学術交流が開始されたハワイ大学マウイカレッジと長年交流しているラップランド大学から教員と学生を招き、ワークショップを行い、そこで制作した作品をショーで発表します。

最後に、ゲスト出演して頂く藤井リナ、藤田富、濱田ここね、DOZAN11の4氏をはじめ、ご協力頂く多くのスタッフの皆様、この場をお借りして心からお礼申し上げます。

1





アグリアート・フェスティバル 2017 について

「水の力 The Force of Water」コンセプト

日本の棚田百選に選ばれた長門市油谷の日本海に面する東後畑の棚田に、田植えの頃水が張られ空を映す。夕暮れになると水平線に傾く太陽の光が海から棚田に伸びて大地と棚田は一体化する。しばらくすると遠く漁り火がひとつずつ幻想的に点灯される。

一方、棚田に張られた水で苗が成長し、秋にはこの棚田特有の自然栽培米が稲穂をたゆませる。長門に降り注ぐ雨が田に流れつき、段々に並ぶ田を巡って海に注がれる。水は循環しながら、空、山、田、そして海に生きるあらゆるいきものに命を吹き込むのだ。

アグリアート・フェスティバル 2017 では、長門市宇津賀地区の自然や農業に着目した。また、長門市出身の金子みすゞが詩っている「水」に係る詩に着想を得て、「水の力」を改めて彷彿とさせる作品を創作した。

今年の新作 mompekkko2017 の稿は、現在国内外から多数の観光客を吸引している元乃隅稲成神社や東後畑の棚田の風景写真を、PhotoMusic ソフトで加工してできた各色のストライプ模様に着想を得ている。

また、アロハシャツの形式に長門の特徴あるモチーフを乗せたオリジナル生地とオリジナルパターンを追求した。元々農業服としても着られていた「アロハシャツ」のルーツを考えて、日本の気候風土にあったシャツ「アロハッコ」を提案する。

スーパーグローバル・ファッションワークショップ SGFWS2017 について

SGFWS2017 は 2016 年度からやまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会が公益財団法人東芝国際交流財団の助成事業に採択されて実施している。海外からのゲストが日本文化に触れながら、日本人とともに服飾デザインの共創をすることを目的としている。特に、山口の地域文化資源である徳地手漉き和紙、柳井縞などの織物そして藍染めなどの伝統工芸と、2000 年代になって新たな地域資源として認定されたデニム加工技術や 4 年前から開発してきたやまぐち縞などに注目し、それらを活用した服飾デザインを試みる。

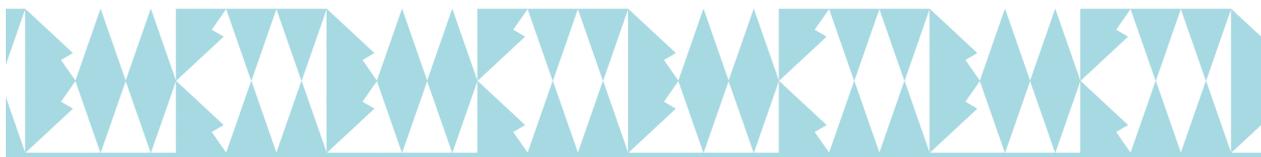
世界の人々が共同で制作することから、自文化を見直したり多文化を理解したりして、国内外へと新しいオリジナル服飾デザインを発信することを目指す。

若者の柔軟な発想による作品は、多くの人々に感動をもたらすものと信じている。短時間でのワークショップで実験的な作品であるがゆえに、多様な解釈が可能だろう。今年フィンランドのラップランド大学、アメリカ合衆国のハワイ大学マウイカレッジ、そして山口県立大学の 3 大学の学生と教員による共創の結果を、アグリアート・フェスティバル 2017 の舞台上でお楽しみ頂きたい。

企画・マネジメント・ディレクション 水谷 由美子

ディレクション Marjatta Heikkilä-Rastas (University of Lapland, Finland)
Cheryl Maeda (University of Hawai'i Maui College, United States of America)

デザイン・制作 Helka Mäkinen (University of Lapland)
Annna Maria Kahalekul/Dava Leynes/Ria Razzauti (University of Hawai'i Maui College)
甲斐 少夜子 / 原田 章子 / 荒木 麻耶 / 高橋 潤一郎 /
河村 早紀 / 下川 まつゑ / 野坂 光里 / 宮坂 莉穂 / 棟久 佑子 /
渡辺 詩織 / 北谷 緑 (山口県立大学)





プログラム

▲ あいさつ

藤井 哲男《山口県立大学専務理事》/白井 純《公益財団法人東芝国際交流財団》/
安倍 昭恵《内閣総理大臣安倍晋三夫人》

▲ 棚田数え唄2017～現代版早乙女とともに～

演者

河原寿会 上野 洋子/梅本 ナミ子/江原 美保子/金本 エミ子/河野 駒之輔/
佐方 貞子/西嶋トヨ子/古川 繁子/前田 信子

河原地区子ども会

現代版早乙女 伊藤 沙耶/井野 歩美/森 つぐみ/坂上 留美/岡山 希
早乙女衣装デザイナー 下川 まつゑ

▲ とどけ！棚田自然栽培米の魅力ー棚田自然栽培米プレゼンテーションー

プレゼンター 大田 寛治《東後畑営農組合》
荒木 麻耶《山口県立大学大学院生》

▲ DOZAN11ミニライブ

友情出演 DOZAN11《レゲエミュージシャン》
「Lifetime Respect」「かしくみかしくみ」「明日の風」「大仕事」

▲ 農ガールコレクション

▲ 金子みすゞの詩×ファッション

河村 早紀	「月のお舟」	(モデル 津村 真衣/堀 綾華)
棟久 佑子	「水と影」	(モデル 松村 日菜)
下川 まつゑ	「波」	(モデル 鈴木 沙江/稲葉 卓)
野坂 光里	「大漁」	(モデル 小松 奈保子/濱田 光衣)
川口 千穂	「鯨法会」	(モデル 向井 夕菜)
宮坂 莉穂	「お魚」	(モデル 岩瀬 美月/山邊 愛理)

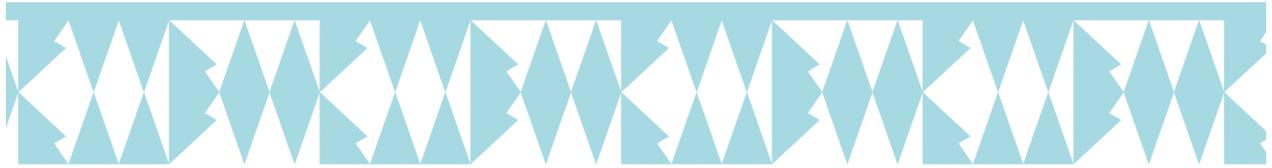
▲ 海外ゲスト作品

Ria Razzauti	「Ola i Ka Wai (Water is Life)」
Annna Maria Kahalekul	「Ka'a ka pōhaku (The Stones roll Thunder)」
服飾デザイナー Marjatta Heikkilä-Rastas	
テキスタイルデザイナー Eija Timonen	「Cosmic Landscape」
Helka Mäkinen	「Northward Yearning」

(モデル 坂上 留美/深川 絵理/Dava Leynes/岡山 希/瀧谷 奈々/藤本 めぐみ)

3





▲ スーパーグローバル・ファッションワークショップSGFWS2017

河村 早紀/宮坂 莉穂/Dava Leynes/荒木 麻耶/北谷 緑 「Ke Kai」
甲斐 少夜子/野坂 光里/Ria Razzauti/棟久 佑子/原田 章子 「Eye of Typhoon」
高橋 潤一郎/下川 まつゑ/Helka Mäkinen/Anna Maria Kahalekul/渡辺 詩織 「Balance」

(モデル 原崎 菜乃波/瀧谷 奈々世/升田 有紀)

▲ アグリワークウェア コレクション

甲斐 少夜子 「IROIRO KASURI」 (モデル 山光 楓/伊藤 沙耶)
水谷 由美子/小田 玲子 「アーマー」 (モデル 早川 恵/森 つぐみ/井野 歩美/嶺 智泉)

▲ mompekkolevel アロハッコ・モンペッコ コレクション

「アロハッコ」 (モデル 作間 克樹/井出 乃阿/鶴野 峻大/井上 雅)
(特別ゲストモデル 藤井 リナ/藤田 富)

〈アロハッコプロジェクトメンバー〉

デザインディレクション 水谷由美子
テキスタイルデザイン・モデリング 野坂 光里/宮坂 莉穂/棟久 佑子
服飾デザイン・モデリング 荒木 麻耶/下川 まつゑ/河村 早紀
モデリング 高橋 潤一郎

テキスタイルデザイン

棟久 佑子 「水鏡～彩・涼～」

水が張られ、空や周りの草木が映る美しい棚田をイメージした。目を引く明るい色合いで、これまでの伝統的な趣のある棚田へ新たな印象を添え、若い方々が更に棚田に関心を持つことを期待し、デザインした。

宮坂 莉穂 「通鯨唄」

現在も長門の行事として模型で行われている捕鯨を、バックプリントにデザインした。クジラの力強さと、民謡として歌い継がれる通鯨唄を日本画風の構図にし、他のアロハッコのテキスタイルデザインとの差異化を図った。

野坂 光里 「fresh circle」

山口県だけで栽培されている伝統果樹の長門ゆずきちを、ちぎり絵を用いてドットで表現した。大きめにちぎることで紙の質感を出し、柔らかな印象に仕上げた。ベースカラーにブルーを使用することによって爽やかで涼しげな一枚を目指した。

「モンペッコやまぐち縞 Nagato2017」 (モデル 黒瀬 雄治/黒瀬 真由美/三好 亨/三好 沙智子/安倍 昭恵)
(特別ゲストモデル 濱田 ここね 友情出演 DOZAN11)

〈モンペッコプロジェクト2017メンバー〉

デザインディレクション 水谷由美子
PhotoMusicテキスタイルデザイン DOZAN11/三木 学/水谷 由美子
服飾デザイン・モデリング 荒木 麻耶
コ・クリエイション・モデリング 企画デザイン研究室ゼミ生
プロダクト 匠山 泊

▲ フィナーレ

4





mompecco

安倍昭恵 × 山口県立大学企画デザイン研究室 × ナルナセバ プロジェクト

当プロジェクトは、安倍昭恵内閣総理大臣夫人が下関で米作りを始めた際、農作業時に若い女性がオシャレに着られる服がない事に気づき、山口県立大学企画デザイン研究室水谷由美子教授に農作業着の共同開発を発案した事に始まる。

日本の伝統作業着「もんぺ」を現代のライフスタイルに寄り添った形に改良した「モンベッコ」。最大の特徴はオリジナルのやまぐち縞をデザインし、生地から作っていることである。日本の伝統織物を持続可能なものへと再生していくためのメッセージとして、2014年から2016年にかけて山口オリジナルの縞柄を提案してきた。

今回は、長門市宇津賀地区の風景写真から、PhotoMusic ソフトを用いて色を抽出し、テキスタイルプリントを試みた。

PhotoMusicとは、写真の色から音楽を自動生成し、スライドショー動画を制作するソフト。写真を赤、橙、黄、緑、青、緑、紫、灰の7色に分けて、そこから楽譜を生成する。7色にそれぞれ楽器の音色を当てはめることで、7つの旋律が奏でられ、写真の印象が音楽に反映されるようになっている。例えば、赤がヴァイオリン、青がフルートのようにすれば、赤い花からはヴァイオリンが、青い海からはフルートの音色が奏でられるのだ。

つまり、写真の色をオーケストラのための楽譜に変えることができるソフトなのである。そして、写真と音楽が同期して奏でられることで、色と音が相乗効果となり、風景に新たな彩りを与えることが可能になる。また、音から色を感じたり、色から音を感じたりすることを共感覚と言うが、このソフトを通じて新たな共感覚が得られるのである。

【やまぐち縞 Nagato2017】



【やまぐち縞 raita2014】



2009年より、山口県立大学企画デザイン研究室はフィンランド国立ラップランド大学と合同研究を行っている。そのフィンランドの民族衣装に見られる伝統縞と山口県の伝統織物である柳井縞・玖珂縞を掛け合わせた縞である。「raita」はフィンランド語で縞を意味する。

【やまぐち縞 takijima2015】



日本の伝統縞文様の中に、「滝縞」がある。暑い夏に目で「涼」をとる日本人の知恵である。また、自然界に存在するものには無秩序に見えて実は秩序ある規則が見られる。植物の花びらの数や枝別れして出る葉の数のように一定の規則「フィボナッチ数列」を配している。日本の伝統文様の中に自然界の数美学を掛け合わせ、涼しさと美しさを融合した縞である。

【やまぐち縞 cosmo2016】



経糸に藍色の糸を採用し、緯糸にはアジアの伝統生活文化に深く影響を及ぼしている中国古代哲学の陰陽五行説の5色(青・赤・黄・白・黒)を使用した。この5色によって幸せがもたらされるとも考えられているため、五穀豊穡や幸せをもたらすモンベッコの生地としてデザインした。

有限会社ナルナセバ

5



2014年10月山口県立大学企画デザイン研究室とのコラボレーションにより新レーベル mompecco を発表。1次産業から6次産業までの農業を視野に、企画デザイン研究室のサテライト研究室として作業着の開発販売を行う。舞台衣装、ダンス衣装および各種アパレルや小物のデザイン販売も行う。





出演者プロフィール

特別ゲスト

藤井 リナ（ふじいりな）



アジア全域で人気を誇るアジアを代表するファッションモデル。
2014年のAAFでもゲストモデルとしてランウェイを歩き、今年で2回目の出演となる。
中国で売り上げNo.1のファッション雑誌でも企画が好評となり、連続起用されている。
TVや映画、CMなど幅広い分野にて大活躍中。

藤田 富（ふじたとむ）



1992年4月14日大阪府生まれ。『仮面ライダーアマゾンズ シーズン1 / シーズン2』にて主演 水澤悠役を演じる。
TOKYOMXTVにて2017年10月～放送開始のアニメ『グラマラスヒーローズ』では声優に初挑戦すると共に自身がリードボーカルを務めるバンド“SHOW - C”がエンディングテーマも歌う。

濱田 ここね（はまだここね）



2004年3月31日宮崎県生まれ。数多くのドラマに子役として出演。
2013年公開の映画『おしん』では、半年にわたる全国オーディションで約2500人の中から主人公の谷村しん役に選ばれ、その演技が評価されて「第37回日本アカデミー賞 新人俳優賞」など映画各賞を受賞した。

DOZAN11（どうざんいれぶん）《友情出演》



レゲエミュージシャン。“三木道三”として「Japan一番」でデビュー。「Lifetime Respect」でジャパニーズレゲエ初のオリコン1位を獲得し、90万枚以上を売り上げた。2014年11月新たな名義“DOZAN11”でニューアルバム「Japan be Irie!!」をリリース。
レゲエ系を主に各地のフェス、イベントに次々出演中。

プレゼンター

大田 寛治（おおたかんじ）



2017年3月末に退職したことをきっかけに、長門市認定農業者として農業に専従する。
東後畑営農組合の一員として、2013年から自然栽培に取り組む。
「宇津賀地区まちづくり協議会」や「東後畑営農組合」、「NPO ゆや棚田景観保存会」などの役員として、地域活性化のための活動にも取り組んでいる。





ブース展示・販売

▲ 出展者一覧

1. 玖珂縮の会

玖珂縮は木綿の糸を加工することで縮にしています。衣・住生活を豊かにするテキスタイルとして発信・提案しています。毎週火曜日10時～16時に逸品館(岩国市玖珂町 582-3)で活動をしています。お気軽にご来場ください。

▶ネクタイ、ストール、Tシャツなど

3. 山口とくぢ和紙振興会 結の香

歴史を持つ山口市徳地の伝統工芸「徳地手漉き和紙」を後世に繋げていくため、住民が主体となって平成26年7月「山口とくぢ和紙振興会 結の香」は発足しました。原料の栽培・加工・商品制作までの作業を一環して行っています。

▶和紙関連商品

5. 匠山泊

匠山泊は2000年より、日本製ファッションの再評価活動を行う中から発展し、2005年に設立した山口発アパレル。2011年に山口ブランド「Re維新」を発表、その後地域商工会議所と連携して推進中。2016年度山口県特産品振興奨励賞を受賞。

▶ジーンズなど

7. 山口ファッション&テキスタイル研究所 Y-FATI

徳地手漉き和紙や柳井縞などを用いた作品のパネル展示を行い、地域資源を活用した服飾に於ける新たな可能性をご紹介します。

▶カタログ、パネルなど

9. おんたちの古民家&Archis

歴史的・文化的価値のある古民家の再生をはじめ、6次産業商品の開発・ブランディング、また地域の特産品を国内外に発信する地域商社です。今日は、「モチベッコ」を限定50袋(5個入り)で販売します。通常は、晴ル家(下関市)、sou café(山口市)、カフェベッコ(宇部市)で販売しています。

▶モチベッコ

7

2. 山口県立柳井商工高等学校

本校は柳井縞の普及と伝統継承を目的に活動を行っています。地域・企業・他学校との連携により柳井縞の取組が広がっています。本校が製作した小型機織機による機織り体験、コラボレーションした柳井縞グッズの展示・販売をします。

▶機織り体験など

4. 宇津賀地区まちづくり協議会

平成25年、東後畑を含む12自治会の合意形成により設立された当協議会では、様々な地域活動団体の協力のもと、地域課題解決に向けた活動を行っています。自立に向けたコミュニティビジネスの取組として、竹炭、竹酢液の製造を行っています。

▶竹炭、竹酢液

6. 東後畑営農組合

平成19年設立の当営農組合では、東後畑集落で自然栽培米の実証実験田の管理も行っています。このブースでは、美しい棚田で収穫したお米と、そのお米から作った米粉を販売します。

▶東後畑産棚田米、米粉

8. ナルナセバ

山口県立大学企画デザイン研究室のサテライト研究室を兼ねており、古民家を活用して土日を中心に山口市大殿大路にて運営しています。今日は、モンベッコやサロベッコ、ツナギッコなどの販売をアグリアート・フェスティバル限定価格で行います。

▶モンベッコ、サロベッコ、ツナギッコなど

10. 山口県立防府西高等学校家庭クラブ

勤労・愛情・創造・奉仕を基本精神として活動する中、「茶の湯」と「種田山頭火」に出会いました。山頭火の水に関する句からイメージした茶碗や雑貨の展示、茶の湯体験コーナーで皆様に癒しを提供できれば幸いです。

▶活動紹介パネル、創作作品





ブース展示・販売 案内図

13:00 ~ 17:30

※開演中は一時中断する場合がございます。

1. 玖珂縮の会



3. 山口とくち和紙振興会 結の香



7. 山口ファッション& テキスタイル研究所 Y-FATI



5. 匠山泊



2. 山口県立柳井商工 高等学校



4. 宇津賀地区まちづくり協議会



6. 東後畑営農組合



8. ナルナセバ



9. おんなたちの古民家& Archis



10. 山口県立防府西高等学校 家庭クラブ



受付

← 文化ホール（劇場）内

WC

正面入り口





スタッフ

総合ディレクター / 服飾 デザインディレクション	水谷 由美子
作曲 / 音楽監督	田村 洋
舞台 / 照明 / 舞台美術	株式会社やの舞台美術
ステー징	REI・KO/Kayo (Studio Ray/ リル・レイ・ダンススタジオ)
ヘアメイク	TAKAKO・井手 弓 (株式会社ファミリー TAKAKO) / 西脇 末美・長原 麻由美・三牧 弘子 (株式会社エミール) / 村上 君子 (ヘアメイクアーティスト) / 村木 みずえ (エステティシャン エステサロン三創) / 相良 文代・河本 千賀子 (ビューティーアドバイザー)
映像撮影	山口メディア研究所
写真撮影	貝崎 健 / 高木 敦志
演出補佐	下川 まつゑ
学生リーダー	宮坂 莉穂
グラフィックデザイン	荒木 麻耶
MC	手塚 茜音
ブースコーディネーター	原田 章子 / 松浦 奈津子 / 宮坂 莉穂
運営スタッフ	河村 早紀 / 下川 まつゑ / 野坂 光里 / 宮坂 莉穂 / 棟久 佑子 / 甲斐 少夜子 / 原田 章子 / 荒木 麻耶 / 高橋 潤一郎 / 松浦 奈津子
スタッフ	手塚 茜音 / 櫻木 祥 / 綾部 美幸 / 坂田 真子 / 嶋田 優香 / 高松 ひとみ / 遠山 優香 / 渡壁 歩未 / 森崎 香奈 / 渡辺 詩織 / 兵頭 真子 / 古川 すみれ / 周田 亮太 / 北谷 緑 / 山本 成美 / 中村 結菜 / 川井 真紀子 / 前野 良恵 / 矢吹 穂衣 / 本田 真悠 / 宗田 望里

協力

山口県立大学 / University of Lapland / University of Hawai'i Maui College / 長門市 / ジャポニスム振興会 /
宇津賀地区まちづくり協議会 / 東後畑営農組合 / 匠山泊 / 重源の郷 紙漉きの家白波 / 藍作研究会 /
飯島 宣雄 (Nobel Co.,Ltd) / 原 亜紀夫・斎藤 麗理 (株式会社 Archis) /
安野 早己・Amy Wilson (山口県立大学国際文化学部教授) / 浦山 晶美 (山口県立大学別科助産専攻教授)
武永 佳奈 (山口ファッション&テキスタイル研究所 Y-FATI 所長 / ファッションクリエイティブ CHIZE) / 宇川 祥弘

9 防府市地域おこし協力隊員 (大道・住岡・高橋)





スタッフプロフィール

企画 / 運営

安倍 昭恵（あべ あきえ）



アグリアート・フェスティバル名誉理事長。内閣総理大臣安倍晋三夫人。聖心女子学院幼稚園から高等学校卒業。聖心女子専門学校英語科卒業。立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科修了。株式会社電通新聞局を経て1987年安倍晋三氏と結婚。趣味は、ランニング、ゴルフ、お米づくり、薙刀。

水谷 由美子（みずたに ゆみこ）



アグリアート・フェスティバル実行委員長。山口県立大学国際文化学部長、教授。山口の地域資源を活かし、服飾デザインを通して、地域のブランディングや商品開発について産学公連携による研究創作やフィンランドのラップランド大学との共同研究を行っている。また、サービスデザインの手法を取り入れた、サステイナブルなデザインアプローチを行う。

荒川 祐二（あらかわ ゆうじ）《作家》

企画デザイン研究室

河村 早紀/下川 まつゑ/野坂 光里/宮坂 莉穂《国際文化学部文化創造学科4年》

川口 千穂/棟久 佑子《国際文化学部文化創造学科3年》

甲斐 少夜子/原田 章子/荒木 麻耶《大学院国際文化学研究科修士2年》

高橋 潤一郎/松浦 奈津子《大学院国際文化学研究科修士1年》

舞台

田村 洋（たむら ひろし）



作曲家。山口県立大学名誉教授。

服を着ていない人間はいない。服飾文化が人類の歴史を華やかに彩っている。山口県立大学のファッションショーの音楽を初回から担当しています。音楽がファッションを彩る一部になれば幸いです。

REI・KO（れいこ）



青山学院大学文学部英米文学科卒。在京中、東京キッドブラザースのミュージカルなどの振付を担当。プロのダンサー・舞台俳優として数多くの舞台・TV に出演。帰山後は地域発信型ミュージカルをはじめ、現在、山口県観光パフォーマンスユニット「やまぐち奇兵隊」、萩・明倫学舎での歴史パフォーマンスを手掛けている。





【問い合わせ先】

アグリアート・フェスティバル2017 実行委員会事務局（山口県立大学国際文化学部事務局 担当：水谷）
〒753-8502 山口県山口市桜畠 3-2-1 TEL 083-928-3423 E-mail aaf20171029@gmail.com

